

中国の歴史における『法華経』と21世紀における意義

楊曾文

菅野博史 訳

『法華経』は早期に漢訳された大乘仏典の一つであり、

中国の歴史、文化の発展の過程において、また北伝仏教が流伝した国家において、重大な影響を生じ、今日においてもなお広範な仏教信徒の信奉を受けている。世紀の交替するとき、たとい科学文化が高度に発展する二十一世紀においても、『法華経』はなお活力を持ち、現代に直面する解釈によって、広範な信徒と各国の民衆の心を通じ合わせ、生命尊重、自然環境保護の国際的な雰囲気を作りあげ、世界平和を擁護する等の方面において、なくてはならない役割を發揮できる

であろうと、予言することができる。

一 『法華経』の漢訳

『法華経』は紀元前後頃、インドにおいて生まれた初期大乘経典の一つである。中国古代において、もつとも影響のあった『法華経』の訳本は、西晋の竺法護の翻訳した『正法華経』と、後秦の鳩摩羅什の翻訳した『妙法蓮華経』である。

西晋太康七年（二八六年）に、竺法護は居士の翦承遠、張仕明、張仲政等の協力のもとで、長安において『正法

華經』十卷二十七品を訳出した。訳出後、すぐに当時の僧俗信徒に歓迎され、人々によって講じられた。

後秦弘始八年(四〇六年)に、鳩摩羅什は長安において『妙法蓮華經』(『法華經』と略称する)七卷二十七品を訳出した。後世に流行した『法華經』は八卷二十八品であり、その中の「提婆達多品」と「普門品」の重頌偈は後人が補ったものである。『出三藏記集』卷第二によれば、南朝齊の僧、法献は高昌(後には多く于闐という)から梵本の「提婆達多品」を獲得して、建康に持ち帰り、瓦官寺の法意(達摩摩提)に訳出を頼んだ。⁽¹⁾「普門品」の重頌偈は、北周の闍那崛多が益州の龍淵寺において訳出したものである(『開元釈教錄』卷十一所載の『妙法蓮華經』の後の小注⁽²⁾)。この二つの部分はいずれも後の人が続々と増補したものである。

このほかに、現存する闍那崛多と達摩笈多の訳した『添品妙法蓮華經』七卷は、品名、文字、偈頌に増加した部分はあるが、大部分の経文は鳩摩羅什の翻訳と同じである。

鳩摩羅什が『法華經』を訳出した後、竺法護の訳した

は、「声聞」、「縁覚」という言い方がある。声聞は、仏の説法を直接聞いて、悟りに到達する者を意味する。縁覚は、無仏の世において、十二因縁の理を観想することによって、悟りに到達する者を意味する。後にさらに「菩薩」という階位を提起したが、これは仏の候補者であり、「上求菩提、下化衆生」を自己の任務とする。声聞、縁覚、菩薩は、いわゆる「三乗」(三種の解脱の道と教える)ことである。大乘仏教が西暦紀元前後頃に興起し、解脱論について、成仏を修行の最高目標とし、またこれを中心として、さまざまな理論を提起し、その中には「諸法は本性として空である」ことを論証することと六度を主要内容とする般若經典類がもつとも影響があり、大乘仏教の重要な理論的基礎を作り上げるようになった。初期大乘經典には『般若經』、『法華經』、『華嚴經』、『維摩經』、『無量壽經』等があるけれども、その中で、すべての人が成仏することができることを特に強調する經典は『法華經』である。

『法華經』は、釈迦仏が声聞、縁覚、菩薩の三乗を区別して衆生を教化したのは、異なる衆生の素質に応じ

『正法華經』はもはや流行しなかった。

二 『法華經』の思想の特色

『法華經』は初期大乘經の中で、きらびやかで神秘に満ちた内容がもつとも豊かに備わり、寓意が深遠であり、譬喩が生き生きとしたイメージをもち、影響の広範囲にわたる經典である。經の全体を総合的に観察すると、それには以下のようないくつかの特色がある。

(一) 一切衆生がすべて成仏できると主張する

仏教の發展史において、原始仏教はただ釈迦牟尼が仏であることを認めるだけで、その他の人々は修行によって解脱に到達することができると考えたけれども、修行の結果の最高の位は阿羅漢であり、成仏することはできなかった。釈迦仏の滅後、一、二百年して、原始仏教は分裂を生じ、上座部と大衆部の二大組織から成る部派仏教を形成し、「過去仏」という説を提起し、釈迦牟尼を最後の過去仏としたけれども、だれでも成仏できるとは考えなかった。修行の結果の位について

て採用した臨機応変の便利なやり方であり、仏の本心から出たものではないと説いている。仏の本意は、「仏の知見を衆生に示し悟らす」、「如来は但だ一仏乗を以ての故に、衆生のために説法し、余乗の若しは二、若しは三有ること無し」(卷一「方便品」⁽³⁾)である。この經は全体的にこの種の言い方がとても多い。たとえば卷二の「譬喩品」では、一人の長者が、「火宅」に居る子供たちを導いて脱出させるために、彼らが火宅から出て来たら、羊車、鹿車、牛車(三乗をたとえる)を自ら取ることができると約束し、彼らが出て来た後、それぞれ一台の白牛を付けた大車(大乘をたとえる)を与えることをたとえて、「初めに三乗を説き、衆生を引導し、然る後に但だ大乘を以て之れを度脱す。……当に知るべし、諸仏は方便力の故に、一仏乘に於いて、分別して三を説く」と説いている。「信解品」は、窮子が父を探し、父が家の財産を相続させることをたとえとし、すべての小乗の人はみな「仏子」であり、「仏は、声聞は皆な成仏することを得ると説く」と説いている。この經はさらに仏が舍利弗、摩訶迦葉、須菩提等の多

くの小乗の声聞弟子のために「授記」(予言)すること
を記述し、彼らが未来に必ず成仏することを説いてい
る(卷三の「譬喩品」)。「授記品」、卷四の「五百弟子受記品」。
仏教は一般に女性に対して差別の態度を取っており、
女性性は梵天王、国王になることができず、また仏にな
ることができないと考えているが、『法華経』は女性が
成仏することができることを提起している。卷四の
「提婆達多品」では、ある龍の娘が『法華経』を聞いた後、
素早く「變じて男子と成つて」成仏することを説いて
いる。「勸持品」では、仏が比丘尼の摩訶波闍波提(釈
迦仏のおば)、耶輸陀羅(釈迦仏の出家前の妻)のために授
記することを記述し、彼女たちが未来に「当に仏と作
ることを得べし」と説いている。

『法華経』の主張は、三乗のすべての人が成仏するこ
とができるという思想であり、後の人々は「開權顯実」
(方便の權門を捨て、真実の一乗の理を示す)、「会三歸一」
(三乗を統合して、一乗に帰着させる)と概括している。

説かれた『法華経』をほめたたえ、また証明をし、この
時、さらに四方八方の仏国に分布している釈迦の分身
仏は、無量の眷属侍者を引き連れてやって来て法を聞
く、と説いている。卷五の「從地涌出品」には、「娑婆
世界」(すなわち現実の世界)の地下にも、釈迦仏の無数
の菩薩の弟子があり、彼らは地から涌出して、未来に
おいて『法華経』を護持し、弘通し、衆生を教化するこ
とを示す、と説いている。「如来寿量品」には、釈迦仏
は「成仏已来、無量無辺百千万億那由他劫」であり、
「成仏已来、甚だ大いに久遠にして、寿命は無量阿僧祇
劫にして、常住にして滅せず」……と説いている。中
国仏教史において、天台智顗の『法華文句』卷九の下、
吉蔵の『法華義疏』卷十はいずれも、『法華経』の中の
釈迦仏は、法身、報身、応身の三身が合一したもので
あり、それは釈迦が久しく法身を証得しているけれど
も、かえって常に報身、応身によって、境地の異なる
衆生のために説法することを意味している、ことを説
いている。⁽⁴⁾

『法華経』に説かれる釈迦の久遠の成仏の思想は、後

(二)「久遠実成」の釈迦仏によって、大乘仏教の仏身 論を形象化する

大乘仏教はただ過去仏が存在するだけと考えるだけでな
く、また現在仏、未来仏の觀念を提起し、しかも仏身
についてもさまざまな説を提起した。その中で比較的
通用している説は、仏には、仏教の絶対的な理念(法性、
仏性)を体現する法身仏、菩薩が無数の時間の修行によ
って法身(法性)を体得して成仏することのできる報身
仏、時機に応じて衆生の中で法を伝える応身(あるいは
化身)仏がある。大乘仏教の理論によれば、歴史上確か
に仏教を創立した釈迦牟尼仏は、応身、あるいは化身
仏に属する。『法華経』は初期大乘經典であり、その中
に法身、報身、応身、仏性等の概念はないけれども、
この経の諸品、とくに卷五の「從地涌出品」以降、釈迦
牟尼仏に対する描写の中に、すでに釈迦仏に、法身を
兼ねる報身の意義を与えている。卷四の「見宝塔品」に
は、釈迦仏が『法華経』を説く時に、一つの宝塔が地か
ら涌出し、その中にはるか昔に成仏し、かつ「滅度」し
た多宝仏があり、わざわざやって来て釈迦仏によって

の人々によって「開近顯遠」(釈迦の応身の寿命が短いこ
とを示し、釈迦の法身の寿命が長いことを顯わす)、「開迹顯
本」(釈迦の応身とその説法を開き示し、釈迦の法身実相の理
を顯わす)と呼ばれた。

(三)「諸法実相」、「十如」等の哲学的な意味の豊富な 概念を提起する

卷一の「方便品」には、「仏の成就する所の第一希有
難解の法は、唯だ仏と仏とのみ乃ち能く諸法実相を究
尽す。所謂の諸法の如是相、如是性、如是体、如是力、
如是作、如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末
究竟等なり」と説いている。いわゆる諸法実相は、大乘
仏法の根本真理にほかならず、これについて異なる解
釈をなすことはできるけれども、『法華経』の基本思想
と結びつけて解釈すれば、それは「一仏乗」、「仏の知
見」、「諸法の寂滅の相」、「大乘の空の義」等にはかな
らない。この経は、明らかに『般若経』の空の思想を吸
収しており、卷五の「安樂行品」の第一の「安樂行」の
中で、菩薩は「一切法は空なり、如実の相なり、顛倒

ならず、不動、不退、不転、虚空の如く所有の性無く、一切の語言の道断え、不生、不出、不起、無名無相、実に所有無く、無量無辺、無障無礙なりと観ず」べきである、と説いている。これによれば、『法華経』の中の実相の概念は、『般若経』、『維摩経』等の大乘經典の中の「実相」、「真如」、「畢竟空」、「法性」、「仏性」、「涅槃」等の概念と通じ合わせることができる。「実相」、「十如」等の概念は、意味において大きな伸縮性があり、さまざまな場合に使用することができるので、古代の中国の仏教学者が教義体系を作り上げるのに用いる重要な概念となった。

(四)現世で苦難を救う観世音菩薩の信仰

『法華経』の中には、菩薩が慈悲の精神によって衆生の中で説法することを述べており、苦難を救う物語は一箇所にとどまらない。巻七の「妙音菩薩品」には、妙音菩薩が各種の姿を化作して、衆生の中に入り、衆生のために『法華経』を説き、衆生の苦難を救うことができる、と説いている。「観世音菩薩普門品」には、観世

音菩薩は、もし衆生が苦難に遭遇し、彼の名号を唱えるのを知ることができれば、彼はすぐに「其の音声を観」じて、救いに行くことができ、また場合によってさまざまな姿(三十三の応身がある)を化作して、さまざまな衆生のために説法することができる、と説いている。周知のように、中国でもっとも流行したものは、観世音菩薩の信仰である。

三 『法華経』と中国仏教

『法華経』は訳出後、すぐに仏教界において広い範囲にわたって伝わり、生み出した影響は多方面にわたる。ここでは、ただその中の比較的重要ないくつかの方面を紹介するだけにする。

(一)古くからの『法華経』に対する注釈と、この経のいわゆる「宗」、「体」に対する解釈

『法華経』の訳出後、多くの注釈書があいついで出された。鳩摩羅什の弟子の中で、多くの人が新たに『法華経』が訳された後すぐに講義をし、あるものはまた著作

を書いた。僧叡はもと『正法華経』をくわしく研究していたが、鳩摩羅什の『法華経』の翻訳に参加し、後に「九轍」(九章に相当する)によって、『法華経』を講義し、人々に「九轍法師」と呼ばれた。曇影も以前、竺法護訳の『正法華経』に精通していたが、鳩摩羅什が新しい『法華経』を訳出した後に、『法華義疏』四巻を撰述して、注釈を加えた。道生は、『法華義疏』二巻(現存する)を撰述した。この後、『法華経』を講義した有名なものには、南朝の宋斉の頃の廬山慧龍、法瑤、僧印、梁陳の頃の法雲、慧思、隋朝の智顗、吉蔵、唐代の窺基等の人がいる。その中で著作を撰述し、現在まで伝わっているものに、法雲の『法華経義記』八巻、慧思の『法華経安樂行義』、智顗の『法華文句』二十巻、『法華玄義』二十巻、吉蔵の『法華玄論』十巻、『法華義疏』十二巻、『法華遊意』、窺基の『妙法蓮華経玄賛』二十巻がある。

智顗は天台宗の正式な創始者であり、吉蔵は三論宗の創始者であり、窺基は法相宗の創始者の一人である。

全体を重んじ、総合を重んずる中国伝統の思维方法の影響を受けることによって、多くの著作はすべて

『法華経』の基本趣旨、中心思想(いわゆる「体」、あるいは「宗」)に対して、探究と解釈を進め、人々の『法華経』に対する認識と関心の所在を反映した。吉蔵の『法華玄論』巻二「第四に経の宗旨を弁ず」は、『法華経』の訳出から隋朝までに、多くの学者がこの経の基本趣旨に対して、自己の見方を提出していることを記載している。その中のもっとも代表的な説は、次のとおりである。

東晋の廬山慧遠は、「一乗を以て宗と為す」

宋齐の廬山慧龍は、「果智を以て宗と為す」

宋の慧観は、「真慧を以て体と為す」

齐の中興寺僧印は、「二乗の実慧を以て体と為す」

梁の光宅寺法雲は、「二乗の因果を宗と為す」

このほかにさらに「二智を以て宗と為し」、あるいは「妙法蓮華を以て宗と為し」、あるいは「常住を宗と為し」、「万善を体と為し」、「二乗を体と為す」等の人がいた。ここで言う「一乗」は、当然仏乗にはかならない。「果智」は、久遠実成の釈迦仏の靈智である。「真慧」、あるいは「実慧」は、諸法実相と相応する「仏の知見」、

「平等大慧」、仏慧である。「一乗の因果」は、「開三頭一」によって成仏の因を顕わし、「開近顕遠」によって成仏の果を示す。吉蔵は、これらの見解に対して、すべて不満足であり、衆生の素質は異なっており、悟りをもたらず因縁にも違いがあり、これによってただ「悟りを以て宗と為す」と説くことができるだけであると考えた。しかしながら、また『法華経』は「実相正法を以て宗と為す」とも考えた。

智顗の『法華玄義』は、『法華経』の体と宗を区別して解釈し、巻八上に「第二に体を顕わす」を載せ、巻九下に「第三に宗を明かす」を載せており、「宗とは、修行の喉衿、体を顕わすの要路なり」と考えた。経の体は、経の宗によって現わされなければならず、両者は不二不異であると考えた。彼は前述のさまざまな説に対してすべて同意せず、いわゆる本門、迹門の「因果を以て宗と為した。彼は経の全体を、安樂行品を境いとして、前の十四品を「迹門」とし、後の十四品を「本門」とした。迹門は「方便を破廢して、真実の仏の知見を開顯す。亦た弟子の実因果果を明かし、亦た師門の権因権

果を明かす。……弟子の実因を成ぜんが為めなり。因は正、果は傍なり。故に前段に於いて、迹因迹果を明かすなり」と説いている。つまり、経の前半は、三乗の方便の教えを廢し、一乗成仏の真実の教えを開顯し、仏は『法華経』によって、それまでの小乗の弟子を導いて仏乗を受け入れさせ、また授記し、また応身の釈迦が因を修して成仏した事績を述べ、そこで弟子は法華の正法（因）を受け入れることを主とし、最後に達成する果を補助とすることを説く。本門は「発迹顯本し、方便の近寿を廢して、長遠の実果を明かす。亦た弟子の実因果果を明かし、亦た師門の権因権果を明かして、師の実果を顕わす。果は正、因は傍なり。故に後段に於いて、本因本果を明かす」と説いている。つまり、経の後半部には、前半部の経と同じ内容があるけれども、もっとも重要なものは、普通の人々が見聞する釈迦仏（迹）は、久しい以前に成仏した釈迦が「方便もて衆生を教化す」るために現われた身（迹）にすぎず、寿命は計量する方法がない。そこで仏の真実の果（いわゆる「師の実果」、久遠実成の釈迦、「本」）を主とすることを述

べている。これによって、智顗は『法華経』の前半迹門の「迹因迹果」と、後半本門の「本因本果」とともに「経の宗」としている。

以上、引用して述べたことによれば、中国古代の仏教学者の考えにおいては、『法華経』のもっとも重要な内容には二点がある。第一に一切衆生はみな成仏することができるといふ一乗、つまり一仏乗の教法を主張することである。第二に法、報の二身の意義を備える久遠実成の釈迦仏の觀念を提起し、歴史上の釈迦牟尼仏はただこの仏の無量の応化身の一つにすぎないと考えることである。彼らの『法華経』に関連する解釈と展開は、すべてこの中心点をめぐってなされている。

（二）法華信仰の諸種の形態

歴代の僧俗が『法華経』の信仰に対して採用した形態は、多種多様である。梁、唐、宋の『高僧伝』、唐の道宣の『集神州三宝感通録』、道世の『法苑珠林』、恵祥の『弘賛法華伝』、僧祥の『法華伝記』、および宋代の李昉の『太平広記』等の書によれば、中国古代の僧俗の『法

華経』に対する信仰は、十分に敬虔であり、信仰形態は、主として講釈、書写、読誦、「法華三昧」の禪法を修行すること、寺塔や仏像（法華変相）を作ること、觀世音を信奉すること、身体の一部、または全身を焼いて仏を供養すること等を含む。觀世音菩薩を信奉することを含む『法華経』を信奉する人には、社会の各階層、上は帝王、大将、大臣から、官位に身を置く士大夫、僧尼、普通の民衆までがいる。彼らの信奉の動機と抱いている願望はさまざまであり、その中には主として、生死の苦悩を超越し、悟り、解脱に到達すること、善い功德を積んで、来世に善い報いを受け、ひいてはあつる人は来世に浄土に往生することを發願すること、遭遇した各種の現実の苦難の中から救われることなどがある。

『法華経』は中国の仏教宗派に対して、さまざまな程度の影響を及ぼしている。その中で天台宗は、『法華経』を基本の經典としており、この経の中の「一仏乗」、「十法界」、「十如是」等の概念と思想によって、教義の理論体系を作り上げており、法華信仰の重要な形態の一つ

である。

ただ上の記述によって容易に分かるように、中国の歴史文化における『法華経』の影響は多方面にわたり、巨大である。

四 『法華経』の現代的な解釈

およびその二十一世紀における役割

世界の科学技術の高度な発展と各国の経済文化の交流が日増しに深く広くなっている形勢のもとで、社会の民衆の生活の中に現われる新しい事物はますます多くなり、民衆の視野はますます広くなり、心のニーズも多種多様である。仏教が旺盛な生命力を保持しようとするならば、常に時代の発展と社会の民衆の心のニーズに適応して、自ら調整と変革を進めなければならぬ。これは多くの方面に及ぶが、その中でもっとも重要な一つの仕事は、現代の思想と概念を用いて、よく用いられる經典に対して、新しい適当な解釈を作り出すことである。中国は古代において、仏教を導入し、伝播する過程において、「格義」(中国伝統の思想・概念を

仏教思想の解釈に適用すること―訳者注の方法を用い、儒家、道家等の伝統文化の中の思想と用語を利用して、仏教經典を翻訳、講義し、力強く仏教の民族化の過程を推進したことがある。これは今後、仏教經典と仏教思想に対して、現代的な解釈を進めるのに、なお手本とする意義を備えている。

ここではただ『法華経』とその思想の現代的解釈について、筆者の考え方を簡略に話す。はじめに強調しなければならぬことは、『法華経』に対する現代的解釈は二つの原則を守らなければならないということである。第一に原典の基本思想に忠実であるべきである。第二に一般民衆が理解することができるようにさせ、『法華経』のある内容が現実の生活の中で積極的な作用を発揮できるようにさせるように全力を尽くして達成することである。では、目前に迫っている二十一世紀において、『法華経』の中のどのような思想に対して、新しい解釈を進め、また発揚するべきであろうか。

(一) 会三帰一、すべての人がみな成仏できるという平等観

『法華経』は、声聞、縁覺、菩薩の三乗、ひいては天龍八部を含む一切衆生がみな『法華経』を聞いて、仏乗を受け入れ、修行によって最後に成仏することができることを繰り返し強調する。「方便品」には、仏が「仏の知見」を衆生に悟らせ、「声聞、若しは菩薩、我が説く所の法、乃至一偈を聞いて、皆な成仏すること疑い無し。十方仏土の中には、唯だ一乗の法のみ有りて、二無く亦た三無し」と説いている。「提婆達多品」には、「一切衆生の類にして、宗奉せざる者無し。又た聞いて菩提を成ずること、唯だ仏のみ当に証知すべし……」と説いている。

『法華経』の中には、まだ「仏性」という概念は無いけれども、實際上、「仏知見」は、後に仏教が常に使用する仏性に相当する。「仏」は悟りを意味し、人生と社会の真理に対する最高の認識である。成仏は、平凡な人生に対する超越であるけれども、けっして衆生を離れることを意味しないし、常に衆生を救い、衆生を悟ら

せることを最高の使命とする。この経は、一切衆生にのみな仏の知見があり、みな最高の仏法を受けることができ、最後にみな成仏することができることを強調する。その深く意味するところは、すべての生命の存在価値、とくに宇宙における人間の崇高な地位に対する重視であり、すべての生命の主体性、教育を受ける権利、発展する権利に対する尊重である。

現代と未来の世界において、平和と発展は、何よりも重大な課題である。大国と小国、先進国と発展途上国、異なる人種と民族はすべて平等でなければならぬ。もし『法華経』の平等観からこの問題を取り扱うならば、このことは当然すぎることである。法華信仰を尊ぶすべての団体と人々は、世界の具体的な情況に合わせて、『法華経』の中に含まれる平等精神に対して、弾力的な解釈と宣伝を進め、それによって世界各國の民族がともに発展するのに有利な国際政治と経済の新秩序の建設を推進するべきである。

(二) 諸法実相、十如、十界の中に含まれる人間と自然の一体論的思想

『法華経』「方便品」の「諸法実相」に対してなす解釈は、「所謂る諸法の如是相、如是性、如是体、如是力、如是作、如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末究竟等なり」である。いわゆる「諸法実相」は、すべてを包括する総体的概念であり、世界の万物の外在的な形象、内在的な性質（性格を含む）、主体、機能、作用、内因、外縁、結果、報い、事物の運動の総体的な過程等の方面を包含している。世界万有は十界（地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天・声聞・縁覚・菩薩・仏）を含み、すべてその顕現であるけれども、本質上からいえば、世界万有はすべて空寂無相であり、いわゆる「諸法は本と従り来、常自に寂滅の相なり」（「方便品」）、「一切諸法は、悉く皆な空寂なり」（「信解品」）である。このように諸法実相は「空寂」の基礎の上で、真如、法性、畢竟空等の概念とたがいに通じ合う。論理的には、すべてが空であり、すべてが実相である以上、すべてがたがいに等しく、さらに円融無礙である。『法華経』の

中には後の天台宗の説く「十界互具」、「一念三千」の命題はないけれども、実相、十如、十界の中に、世界万有が一体であるという思想が含まれていると説くことは、こじつけとは感じられない。

世界万物の一体論の思想と中国の伝統思想の「天人合一」の思想は、本質的に一致しているところがある。世界万有が相即融通し、万物と自我が一体である以上、自然界と人類社会もたがいに一体である。工業、経済の迅速な発展にともなうて出現した世界の深刻な汚染や、自然環境の巨大な破壊を受けた現代において、とくに人類社会は自然界とたがいに調和しなければならぬという思想を強調し、常に世間の人々に向かって警告を発するべきである。後の結果を考えない自然界に対するすべての無制限な要求と略奪は、必然的に自然界の情け容赦のない懲らしめを受けるであろう。

(三) 「六度」、「慈悲」に新しい意義を与え、社会倫理の觀念を豊かにし、社会と民衆を幸福にする

『法華経』は大乗經典として、六度を「菩薩道」の基

本的な行為規範と規定している。「分別功德品」には、もしある人が『法華経』を受持することができ、かつ「兼ねて布施、持戒、忍辱、精進、一心（禪定のこと）、智慧を行ぜば、其の徳は最勝にして、無量無辺なり」と説いている。この六度について、完全に現代生活に結びつけて、新しい意義を追加することができる。たとえば、「布施」は物質的に「貧を救い苦しさを濟し」、さらには財政援助（財施）までの意味を持つだけでなく、文化教育事業を興して、知識、真理を普及させること等（法施）を含み、また特定の場合に精神的に人々に慰めと激励（無畏施）を与えることを含む。この方面についてなすべきことはとても多い。

慈悲は、大乗仏教の最高の道徳觀念である。『法華経』の中の多くのところで、慈悲を取り上げている。とくに「妙音菩薩品」、「觀世音菩薩普門品」は、苦難を救済する菩薩の大慈大悲の精神をもっとも現わしている。慈悲は、人々に安樂を与え、悲は人々を苦難から脱却させることである。現代社会において、慈悲は人道主義とたがいに通じ合うことができ、大いに提唱すべきで

ある。ある国が自然災害、戦争に遭遇することによって生存をおびやかす困難や苦難に直面する時、法華仏法を信奉するすべての人々は、国際社会と力をあわせて積極的な救援をするべきである。

未来の二十一世紀の北伝仏教、とくにその中の『法華経』を基本經典と奉ずる天台宗やその他の仏教宗派は、やはりこの経を最高の經典として尊び、かつ継続してこの経の内容に基づき、この経の内容を発揮し、自己の教義体系を充実させるであろう。しかしながら、未来の法華仏法は必然的に新しい時代の特色を豊かに持つであろうと予想することができる。

注

- (1) 大正五五・一三中を参照。また『開元釈教録』卷六（大正五五・五三六上）を参照。
- (2) 大正五五・五九一中を参照。
- (3) 本文で用いた『法華経』は、金陵刻経処の同治十年（一八七二）の刻本である。以下においては頁数を明記しない。
- (4) 詳しくは大正三四・一二八、六〇二―六一〇を参照。

(5) 以上は、『高僧伝』、『唐高僧伝』の中の関連する本伝、吉蔵の『法華玄論』巻一（大正三四・三六三）を参照。あわせて湯用彤『漢魏兩晉南北朝仏教史』第二分冊第一章「南北朝釈教撰述」の甲を参考にできる。

(6) 大正三四・三七九―三八一を参照。

(7) 大正三三・七九五上を参照。

一九九九年二月二十日 北京南方庄公寓において 楊曾文

(よう そうぶん／中国社会科学学院世界宗教研究所教授)
(訳・かんの ひろし／創価大学教授)